
遥か彼方より海を越えて

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か彼方より海を越えて

【Nコード】

N1689E

【作者名】

イヌズキノネコ

【あらすじ】

《シャッフル企画：愛田美月先生 イヌズキノネコ》【あらすじ】
高校進学に伴って生まれ育った島を離れ、本島へと生活の場を移した《新藤竜一》。慣れない環境に戸惑いながらも周りからの助けを借りて、なんとか一年を過ごしてきた。そして、今年 二年生へと進級した竜一は、同じところに住んでいる《佐波理衣奈》・《赤井悠》と共に、新たな生活の幕を上げる。この物語は、彼らが住む島恋荘の新生歓迎会前日の話。彼らの日常風景を描いたものである。

本編

『 さあ、第2ラウンドのゴングが今鳴り響きました。第1ラウンドにダウンを奪われた闘希選手、このラウンドで巻き返す事が出来るのか！？』

異種格闘技最強決定戦。世界一を決める戦いは、手に汗握る攻防を見せている。

「よし、そこだ！ やれえ！」

1ラウンド目にまさかのダウンを奪われた日本人選手《闘希》。熱のこもった場内からの声が彼の背中を後押しする。

「 ああ……ちがう。そうじゃなくて、こうだ！」

観客は批判を交えながら、ジェスチャーを駆使して選手に指示を出す。

「そう、そう それだ！」

周りの見えなくなった俺は、リングの上に立つ2人以外視界に入らなくなっていた。

「今のは利いたぞ、たたみ掛けるお！」

青いグローブをしている闘希のローキックに、顔を歪ませる赤いグローブを締めた白人選手《アンドリュース》。一瞬の隙について、

青いグローブをはめた拳がうねりを上げた。

「いけ、いけ、いけえええ　　！！」

右から左から打ち出される拳に防戦一方のアンドリユー。赤いグローブの隙間から見える顔には、焦りの色が見てとれた。

『形勢逆転！！ 闘希選手の猛烈なラッシュに、アンドリユー選手反撃する事ができません！ 場内にこだまする声援もヒートアップしています』

グローブとグローブがぶつかる度に、鈍くて重い音が響き渡る。どのパンチもヒットすれば、たちまち相手を玉砕してしまい兼ねない 言わば“一撃必殺”の攻撃。闘希のこの試合に賭ける想いが、今日の前で具体的な形となっている。

彼の勝利に対する執念は、俺の心にもすっかり届いていた。気付けば俺は両手を握りしめて、彼の気持ちに便乗していた。

「……………勝て……………勝て……………勝てえええ！！ 世界一は目の前だ、ゼツタイ勝てえ　　！！」

場外にまで轟くような大声援。俺の想いは小さなホールの壁を越えた。

「竜一！　うるさあ　　い！！」

鋭く尖った高音の聲が、場外から返ってくる。

「さっきからずうっと大きな声出して、一体今何時だと思ってるのよ！ 隣の私の部屋まで聞こえてきてるし、もう少し静かにして！」

後方から飛んでくる言葉には、凄まじいほどの怒りが込められていた。

俺は声のする方へ振り向きながら、弁解の言葉を口にした。

「仕方ねえくдаро？ 今良いところなんだから……」

「仕方ない？ この状況に置いて、あんたには詫びる気持ちが無いわけ？」

訳を話すことで理解を求めようとしたのだが……どうやら状況は、悪化してしまっただけだ。

床に腰をおろしている俺は、入口で仁王立ちしている女の子
《佐波 理衣奈》さなみ りいなを見上げて、これ以上怒りのボルテージが上がらないように和解交渉へと踏み切った。

「いや、そのさっきは……言葉を誤った」

「はあ？」

「だから……何ていうかな。えっと……ごめん」

頭を掻きながら、謝罪の言葉を口にする。

「へえ、素直に自分の非を認めるんだ？」

「……ああ」

「そ、そう……」

俺の返答に理衣奈は目を丸くしている。

「じゃ……じゃあ、騒いでいた事については？」

「それも悪いと思っている」

「あんた、悪いと　　って、ええ!？」

開いた口が塞がらない様子の理衣奈。今回のような場合、いつもの俺なら素直に非を認めたりはしない。理衣奈に反発して、そのまま言い争いへと発展していくのがセオリーだ。なのに現状は、そうはなっていない。思惑の外れた理衣奈が、この状況を飲み込めないでいるのは当然の事であり、今見せている反応も実に素直なモノだった。

「そ、そうなんだ……」

毒気の抜かれた理衣奈は張り合いのないサンドバックを前にして、打ち出すはずだった拳をゆっくりと下していった。

「それなら……まあ、いいわ。今回は素直に非を認めてるみたいだ

し、それに免じて許してあげる」

動揺の見られる理衣奈は、なぜか腕組みをして威張ったような態度をとった。俺はそんな彼女に「ありがとう」と、お礼の言葉を返した。だが普段使わない言葉のためか、たった5文字の言葉がスナリと口から出なかった。俺のぎこちない返答に理衣奈はクスツと笑い、強張っていた表情を柔らかくした。

「でも、今度からは注意するのよ」

理衣奈は左手を腰に当てて、右手の人差し指を俺の方に突き出してくる。優しく微笑む姿は、まるで手のかかる子供を躾ける母親みたいだ。

「私だってこんな事、言いたくな」

「うわああああ　！？」

突然理衣奈の声に被さって、背後から騒がしい音が聞こえてきた。大勢の人間が上げる悲鳴にも似た叫び声。それは、尋常じゃない出来事が起こっている事を意味している。

何が起きているのか気になった俺は、咄嗟に後ろを振り返った。

『な、なんという事でしよう！？　防戦一方だったアンドリュー選手のカウンターが、見事に闘希選手の顔を捉えました！』

「……えっ！？」

ブラウン管の中の映像は、さっきまでとは全く別の状況を映し出していた。

リング中央で大きく息をし、セコンドの元へ歩み寄るアンドリュ

！。一方、闘希はリングの端で仰向けになり、動く事を知らない人形のように倒れている。

「な、何が起きたんだ？」

ちよつと目を離していた間に、戦況が大きく変わっている。応援していた闘希がどうしてこうなったのか、その理由を無性に知りたくなった。

テレビから少し視線を外して、辺りを見渡す。すると、ベッドの上で正座をしている親友の《赤井^{あかい} 悠^{ゆう}》の姿が目に入った。無言でテレビに嚙り付いている悠は、この部屋と同化してしまいそうなくらいに存在感を失っている。ここまで気配を消せるとは、やはり武道に身を置いているからなのだろうか……。

悠の実家（赤井家）は、副業として道場を営んでいる。先祖代々受け継がれてきた武術を護身術として、地域の人たちに教えているらしい。その跡取りである悠もまた武術を学ぶ者として、日夜修練を積んでいる。他人に気配を悟られぬように行動を起こす事も頻繁にあることだ。なんでも武術を学ぶ者にとって、己の肉体はもちろん、存在を自在に操れるようになる事も重要なことらしい。だからといって、友達という時まで気配を殺す必要はないのでは？ まあ、悠はそれが出来ないから日々鍛練を行っているのだろうけど。

こいつの場合性格が内気だから、存在感を消すのではなく、出す訓練をしている（らしい）。そのため、気を許すと今のように居るのか居ないのかわからなくなってしまう。「一緒にテレビ見ようぜ！」と誘っておきながら、友達がいた事を忘れている俺もどうかとは思うが……。

俺は一部始終を目にしている悠に、事の真相を訊ねた。

「悠、おまえ見てたんだよな？ 何が起こったのか説明しろ！」

悠は無愛想な顔をこっちに向けて、眼鏡のフレームに手を当てながらそつと口を開いた。

「闘希の右ストレートに合わせて、アンドリューが右ハイキックでカウンター」

「マジで!？」

頷く悠。眼鏡の奥で輝く瞳が、真実である事を物語っている。

「何してんだよ！ せっかく良い感じだったのに……。もしかして、俺が応援するのを止めたからこうなったのか？ かあ、それならもっと応援しとけば良かった。途中で余計な邪魔さえ入らなければ」

感情を露わにする反動で、声が大きくなっている。が、今そんな事を気にする余裕はなかった。俺は天井を見上げて、悔しい気持ちをすべて吐き出した。

嘆きの言葉を口にして、気持ち少し落ち着いてきた。テンシヨ

ンが降下すると共に、天を仰いでいた俺は視点を地上に戻した。

目線を落とした世界には、依然ざわついている人々を映すテレビとベッドの上で正座をしている悠がいた。俺はため息をこぼしながら、そつと悠の方に目を配らせた。

楽しい時でさえ笑みを零すことの少ない悠は、いつもの愛想ない表情をしている。ただいつも見せる表情より若干硬めな感じがする。毎日顔を合わせる俺だからこそ分かるのかもしれないが、頬のしまり具合が約5%ほど上がっていて、目の大きさが約1mm拡大している。わかりやすい表現をするなら、“顔を引きつらせている”という事だ。

「悠、どうした？」

悠の瞳がこつちを向く。悠は言葉を発さずに、目で合図を出してきた。

（後ろを……向け？）

指示に従って、首を180°回転させる。そこに悠の顔を引きつらせる原因があった。

「こんな事言いたく……こんな事言いたく……こんな事言いたく……」

呪文のように何度も呟かれる言葉、しわの寄った眉間、ぴくぴくと微動するこめかみ。目に映る全て事象が、入口に立つ少女の状態を表している。こんなにわかりやすい感情の表現方法は、今までの人生で初めて見た。

「りゅーっいちーい」

理衣奈の怒り狂った目が俺の顔を捉える。ロックオンされてしまった俺は、反射的に身を固めた。

「あんたさ、人が真面目な話をしているときに余所見をするなんて一体どういう神経してんの？」

理衣奈の放つ軽めのジャブが、俺の心を揺さぶってくる。

「しかも、私の事を邪魔者扱い。反省の色が全然見えないわね？」

付け入る隙のない攻撃は反撃のタイミングを与えてくれない。

「さっきまで許そうと思っていただけ、気が変わったわ。今日という今日は、絶対に許さない！！」

理衣奈の発した言葉は、戦いの始まりを知らせるゴングのように場の空気を緊迫させた。

部屋の中に入ってきた理衣奈は闘争心をむき出しにして、標的である俺の元へ迷うことなく進んでくる。目の前まで来ると足を止めて、両手を腰にあてた体勢で俺の事を見下ろしてきた。

「いつも同じこと言ってるんだから少しは学習しろ、この単細胞！！ 毎晩バカのように騒いで、あんたはママのお乳を欲しがる子供か！ いや、子供だって一度言い聞かせれば繰り返し返さないように努力するわよ。つまりあんたは子供以下、学習能力ゼロの大バカよ！！」

発せられる暴言はガードの上からでも十分に威力がある。俺は甲羅にこもった亀のように身を縮めて、次の攻撃に耐える態勢を整えた。

「夜行性のバカほど迷惑なものはないわ！ 他人の迷惑も顧みないようなら、もう一度小学校からやり直せ！」

一度火のついた理衣奈は止まる事^{とど}を知らず、別の角度からも攻撃を仕掛けてきた。

「そういえば竜一って裁縫が得意だったわよね？ 喧嘩するしか能のない男が裁縫って……。それって“バカの一つ覚え”ってやつ？ 前から思っていたんだけど、その顔で手芸は似合わないわよ！」

趣味まで貶^{けな}してくる理衣奈に、身体が熱くなり始めた。今までじっと耐えてきたが、どうやら堪忍袋も限界が近いらしい。

（堪える！ 今反論すれば、間違いなく収集がつかなくなる。明日は大事な日なんだから、ここは耐えるんだ！）

俺は唇を噛みしめて、膨れ上がる感情を抑制した。しかし一時的に抑え込んだだけの行為では、この衝動を消し去る事までは出来ない。そんな状態になっているなんて知るはずもない理衣奈は、憎たらしい笑みを浮かべて遠慮のない言葉を続けざまに浴びせてきた。

「あ、そうそう。明日竜一の妹もここに来るんだっけ？ あんたの妹ってことは……もしかしてあんたと似た性格してるんじゃないでしょうね？ うわぁ、明日からまた悩みが増えそう。これ以上の面倒は遠慮したいのに……」

理衣奈がそう口にした瞬間、俺の中で何かが弾けた。

「理衣奈、てめえ……」

歯止めを失った身体は、内から押し寄せてくる怒りを制御できなくなった。怒りは俺の身体の内を奪い、そして俺自身をも飲み込んでいく。理性の働かない俺は促されるままに腰を上げ、威嚇するように理衣奈を上から睨みつけた。

「な、なによ！」

突然立ち上がった俺に、理衣奈が一步後退する。

「俺の事ならともかく、真奈美ちゃんの事を言うのは我慢ならねえ……」

堪えてきたうっぶん晴らすように怒鳴り声をあげる。

「言っておくけどな、真奈美ちゃんは良識のある賢い女の子なんだぞ！ それをバカにする権限がお前にあるのかよ！」

「べ、別に、あんたの妹をバカにするつもりなんてなかったわよ。竜一がちゃんとしてさえいれば、妹さんを話に出す事もなかったし」

理衣奈の返しに、俺は益々熱を上げた。

「なんだとお？ 話には出せよ！」

「……はあ？ あんた何言ってるの？」

「だから“話には出せ”って言ってたんだよ!」

「今あんた、話に出すなって言ってたじゃない!」

「別にそんな事言ってるじゃない。ただ、バカにするような発言はするなって言ってたんだよ!」

「……言っている意味が全然わかんないけど」

「なにい!? だから、俺のかわいい妹である真奈美ちゃんの事を
もっと話に出せって」

「いや、あんた今なんで怒ってるんだっけ?」

「真奈美ちゃんをバカにされたからだ」

「そうよね、妹さんの事で怒ってるのよね。だから、話に出しさえ
しなければ良かったんでしょ?」

「そうなんだけど……いや、そうじゃない!」

「はあ?」

「だからだな」

俺は右足を一步前に出して、聞き分けの悪い理衣奈に詰め寄ろう
とした。その時、俺と理衣奈の間に何かが割って入ってきた。

「ゆ……ゆっ!?!」

火花を散らす俺たちの戦いに、水を差したのは悠だった。悠は俺たちの間に入り込むと、手のひらを突き出して制止するように指示を出してきた。いつも傍観しているだけの悠が、俺たちの喧嘩を止めに入っている。その意外な行動が感情的になり過ぎていた俺に冷静さを与えた。

「悠、おまえ……」

冷めた表情で悠が見つめてくる。

「ユウ……」

理衣奈も肩の力を抜いて、熱くなってしまった自分を静めていた。落ち着きを取り戻した俺は、さっきまでの行動を反省した。今日は反論しないと決めていたのに、結局言い争いを演じてしまったのだから。

自身の弱さを思い知った俺は、もっと大人にならないといけない。そう、本気で思った。そして大人になるための第一歩として、喧嘩相手である理衣奈に謝る事を決めた。

理衣奈の方を向くと、あっちも俺の事を見ていた。さっきまで口論していたのが嘘のように、今は素直な気持ちで向かい合っている。理衣奈と視線がぶつかり、妙な恥^{がゆ}ずかしさが胸をくすぶってきた。口元が弛んでしまうようなむず痒さ。俺はニヤケそうになる顔を必死に抑えた。すると、今さっきまで言おうとしていた言葉が胸の内に引っ込んでしまった。

じっと見つめあったまま、何も出来ない俺と理衣奈。そんな俺たちを見兼ねたのであろう。悠が肩をポンと叩いて、喝を入れてきた。

「理衣奈……」

「竜……」

いつも見ているだけの悠が、俺たちを仲裁してくれた。3人中で一番奥手な悠が、俺たちに勇気を与えてくれた。悠が用意してくれたこの舞台に、俺たちが上がらないわけにはいかない。

迷いが吹っ切れた俺は理衣奈の目を見つめて、言おうと決めた言葉を口にした。

「ファイ!!」

……。

………？

あれ？

俺、まだ何も言っていない……よな？

聞こえてきた意味不明な言葉に俺は困惑した。目の前では理衣奈

がキョトンとした顔をし、同じように困惑している。俺は何も言っていない。理衣奈が言葉を発したわけでもないようだ。ということ……。

俺はこの部屋にいるもう一人の存在に目を向けた。俺と理衣奈の間に立っているそいつは、首を左右に振って両方の顔色を窺っていた。

「……悠？」

間抜けな声で話かける。悠は拳動不審な行動をとりながら、真顔であの言葉を口にした。

「ファイ！」

聞き間違いではない。確かに言っている。しかも言葉を発する際に、レフリーがとるような動作を真似ている。

（こいつ、いったい何をしてるんだ？）

啞然としている俺に代わって、理衣奈が質問をした。

「ユウ、あんた何してんの？」

「……ファイ？」

「いや、“ファイ？”じゃなくて」

「ファイ！」

「……」

理衣奈の表情が険しくなっていく。俺も理衣奈と同じ気持ちだ。

「ユウ……あんた、私たちを止めようとしてくれたんだよね？」

「ファイ」

「いや“ファイ”じゃなくて、返事は“はい”でしょ？」

「ファイ」

頓珍漢な発言を繰り返す悠に、理衣奈の目が冷たくなっていく。

「……ねえ、竜一。私、キレてもいいよね？」

理衣奈はイライラを我慢しながら、俺に許可を求めてきた。本来なら許可すべきことではないのだろうが、俺も悠の発言には嫌悪感を抱いていた。だから、俺は無言で首を縦に振った。

その後、俺たちがどうなったのか。それは語るまでもないだろう。深夜12時に鬼と化した理衣奈は怒りが冷めるまで暴走し、午前4時の就寝間際まで怒鳴り声が止む事はなかった。

キャラクター原案

ここでは本小説に登場したキャラクターについて紹介します。物語の中では描かれていない特徴なども含まれておりますので、キャラクターの人柄をもっと知っていただけたと思います。ちなみに、キャラクターの原案は愛田美月先生から頂きました。

《キャラクター原案》

1 - 名前 新藤竜一（しんどおりゅういち）

性別 男

年齢 十六 高校生

容姿 長身。体格が良い。よい顔立ちをしているが、目つきが悪い。
長所短所 困っている人を見るとほっとけない。面倒見が良い。短気。

特技 ケンカと裁縫。

趣味 妹の服づくりとぬいぐるみづくり。

2 - 名前 佐波理衣奈（さなみりいな）

性別 女性

年齢 16 高校生

容姿 身長146センチ細身の可愛い女の子。目が大きい。
長所短所 親しい相手には毒舌。涙もろい。頭の回転が早い。八方美人。

特技 ぶりっこ

趣味 料理作り（でも作った料理は破壊的に不味い）

3 - 名前 赤井悠（あかいゆう）

性別 男

年齢 16 高校生

容姿 細身の美形。だが眼鏡をかけていて余り目立つ存在ではない。
身長は低め。

長所 短所 引っ込み思案。優柔不断。優しい。おっとりしている。

特技 格闘技

趣味 盆栽いじり。家の道場で体を動かすこと。（父は格闘家）

《愛田美月先生ならびに企画に参加された方》

最後になりましたが、期日を過ぎて投稿する事となった無礼をどうかお許し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689e/>

遥か彼方より海を越えて

2010年10月9日21時05分発行